TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

トイブックコレクションシリーズ　ガンダムオペレーション　ア・バオア・クー

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 002

地球連邦軍モデル編

TOYBOOK

ア・バオア・クーを制した地球連邦軍兵器
E.F.S.F. arms which controlled A BAOA QU

「連邦はジオンに比べれりゃ10年遅れているんだ。与えられたものの中で最大限に考えて生き延びるんだな」。ホワイトベース艦長ブライト・ノア大尉はソロモン攻略戦の後、こう言ったと伝えられている。この一言からもわかるように、兵器開発において地球連邦軍はジオン公国軍にかなりの遅れをとっていた。ジオン軍のモビルスーツ（以下MS）投入が開戦と同時だったのに対して、連邦軍MSの本格的な量産、実践配備が一年戦争末期の10月～11月だったことからも明らかである。一年戦争においてMSが果たした役割を考えると、連邦軍にとって相当のハンディキャップだったに違いない。

しかし、両軍の雌雄を決することとなったア・バオア・クー戦において、その軍配は連邦軍に上がった。兵器におけるハンディキャップを最終的には埋めることができたのである、それは、連邦軍の戦略によるものとも言えるし、ギレン・サビ総帥の暗殺など、ジオン軍にさまざまな問題があったからだとも言える。だが、前述のノア大尉の言葉通り、与えられたもの（＝兵器）を最大限に生かしたことが、連邦軍の勝利につながったのではないだろうか。

この巻では、そんな地球連邦軍の兵器に焦点を当て、ア・バオア・クー戦を振り返ってみよう。

伝説となった、連邦の“白い奴”

地球連邦軍がモビルスーツ（以下MS）開発計画「RX計画」の集大成として完成させたのが、連邦軍最初期の試作型白兵戦用MS、RX-78ガンダムシリーズである。中でもアムロ・レイ少尉の乗機として知られる2号機は4ヶ月足らずの戦いで、一説には百機以上とも言われるジオン軍機を葬り、ジオン軍人から“白い奴”として恐れられた。

ガンダムは、戦艦クラスと言われる出力を発揮するビーム・ライフルや、MSを容易に両断する格闘兵器ビーム・サーベルといった高火力兵器を装備したうえ、至近距離からのザク・マシンガンの銃撃をも跳ね返すルナ・チタニウム（ガンダリウム合金）製の装甲を持つなど、当時のMSとしては最強の矛と盾を施されていた。さらに機動力の面でも、単位重量当たりのスラスター推力が、ザクⅡの2倍近い数値を示すなど、戦闘兵器に必須とされる火力、防御力、機動力の三要素を高いレベルで併せ持った革新的MSであったのだ。これに、戦闘データの蓄積により機体管制機能を高度化する教育型コンピューターや、パイロットの生存性向上とデータ回収を目的としたコア・ブロック・システム、そしてニュータイプと呼ばれるエースパイロット、アムロ・レイの戦闘能力が加わったことで、伝説的名機「ガンダム」の名は不動のものとなったのである。

一年戦争末期のガンダムは、ジオン軍の新型機が次々と出現したことや、常識を超えて成長しつつあったアムロの反応速度に機体そのものが追従できなくなったこともあり、登場当時のような圧倒的なアドバンテージは失いつつあった。だが、ソロモン攻略戦後に施されたマグネット・コーティング処理により、アムロに対応できる半ニュータイプ仕様のマシンとして再生。そして、ア・バオア・クー戦では“赤い彗星”シャア・アズナブル大佐のニュータイプ用MS、MSN-02ジオングと互角以上の戦いを繰り広げている。

さら星のごとく輝くジオン軍のエースやベテラン兵、MSやモビルアーマーを次々と撃破したガンダムであったが、ア・バオア・クー内の戦闘で遂に沈座。その戦いの日々に終止符を打った。そして「ガンダム」の名は、最強の称号として数々の機体に受け継がれていくことになる。

SPEC●型式番号：RX-78　開発工廠：ジャブロー　全高：18.0m　本体重量：43.4t　ジェネレーター出力：1380kW　スラスター推力：5万5500kg　装甲材質：ルナ・チタニウム　武装：頭部バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ジャベリン×2、専用ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカ、ガンダム・シールド、ガンダム・ハンマー、ハイパー・ハンマー

RX-78 GUNDAM

RX-78 ガンダム

RX-78-2

必殺の矢を持つ、赤い“弓兵”

RX-78ガンダムを生み出した「V作戦」で開発された中距離支援型MSが、RX-77ガンキャノンである。ガンキャノンは、白兵／近距離戦で敵機を撃破する通常のMSと異なり、砲撃による後方からの攻撃や敵機の足止めを得意とする機体である。通常のMSを敵と切り結ぶ歩兵と仮定するなら、ガンキャノンは間接攻撃に秀でた弓兵に近い発想で設計されたと考えることができよう。

そのガンキャノンに装備された“弓”が、左右の肩に1門づつ設置された240mmキャノン砲だ。このキャノン砲は口径から予想される通り、対MS用として充分な破壊力を持つ兵器で、重装甲のドムであっても一撃で戦闘能力を奪うことが可能である。この砲の特徴として挙げられるのが、RX-75ガンタンクのものと比較して明らかに短い砲身だ。これは、MSそのものの運用前提と関係あると考えられる。有視界以外のほとんどの攻撃手段が無効となる、ミノフスキー粒子散布下での運用が主目的の兵器がMSであり、これは支援型MSであっても変わらない。つまり宇宙世紀の戦場（特に宇宙間）では、視界外の機動目標に命中弾を与えるのは極めて難しいのだ。そうである以上、支援機に分類されるガンキャノンであっても、比較的近いレンジで敵機を攻撃する必要に迫られるため、長射程を得るための長い砲身は不要との判断があったのかもしれない。これは敵弾にさらされる可能性が高いことを意味しているが、ガンキャノンはルナ・チタニウム製の重破甲をまとうことで、この問題をクリアしている。これによって機動性は低くならざるを得ず、至近距離での戦闘能力も限定的なものとなったが、聡明なはずの“弓兵”は、打たれ強さを持ったMS駆逐用MSとでも言うべき性能を施つに至ったのだった。

2機（1機との説もある）のガンキャノンを擁したホワイトベース隊では、前述のスペックを踏まえ、母艦の防衛やガンダムの支援など機動力を問われにくい場面で運用することが多く、その火力で多くの敵機を撃墜した。同隊のガンキャノンはア・バオア・クー戦にも投入されたが、ア・バオア・クーに到達後、ホワイトベースと共に行動不能に陥り、放棄されている。

SPEC●型式番号：RX-77　開発工廠：ジャフロー　全高：17.5m　本体重量：51.0t　ジェネレーター出力：1380kW　スラスター推力：5万1800kg　装甲材質：ルナ・チタニウム　武装：頭部バルカン砲×2、240mmキャノン砲×2、3連装ミサイル・ポッド、専用ビーム・ライフル、手榴弾

RX-77
GUNCANNON
RX-77 ガンキャノン

ジオン公国にとどめを刺した、顔のないMS

一年戦争末期の戦闘において大量に投入された、連邦軍の主力MSがRGM-79ジムである。その外見から想像できるように簡易版RX-78と言うべき機体で、ガンダムから過剰（高価）な装備を取り除き、量産性を追及した結果がジムであると考えて差し支えないだろう。

地上戦では航空攻撃や地形の利用等によって、MSの不足を補うことが可能だった連邦軍だが、宇宙戦となればMSの独壇場である以上（本来MSは空間用の兵器である）、連邦軍もジオン製MSに対抗できるMSを配備しない限り、宇宙に本拠地を持つジオン公国を屈服させることはできない。ガンダムは強力なMSであったが、最初から量産性を考慮していない極めてコストが高い機体であるため、それとは別の低コストなMSが必要であった。そこでガンダムで得られたデータを基に開発されたのが、ジムである。

ジムは、ガンダムに見られたコア・ブロック・システムやルナ・チタニウム製装甲等の“超装備”は持たないが、汎用主力MSの必要条件を重視したシンプルなマシンで、ビーム系の射撃・格闘兵器やシールド等、ジオン軍のMSに対抗可能なだけの装備を施されていた。“MSと戦うためのMS”として誕生したのがジムなのである。

連邦軍はジオン軍のように多種多様な機体は開発せず、そのMS生産力の多くをジムシリーズに割り振った。それは国力においてジオンを上回る連邦が、生産ラインをジムに一本化すればただでさえ高い生産性がさらに上がり、より多くのMSを前線に送り出せるからではないのか（これはジムが徹底した消耗兵器であることも示しているが……）。「戦争は数」という真理を、連邦軍はジムの量産という形で実践したのだろう。そして、ソロモン攻略戦やア・バオア・クー戦で大量に投入されたジムは、ジオン公国を倒す直接的な力となったのである。

一年戦争終戦後も、ジムは連邦製主力MSのスタンダードとして、多くの派生機や後継機の母体となっていくことになる。

RGM-79

GM
RGM-79 ジム

RB-79 BALL

RB-79 ボール

ジムのために生まれた、異端の支援兵器

ジムの支援用に連邦軍が配備した宇宙専用武装ポッドで。MSに分類されることもある。U.C.0079年10月には戦場で確認されているシリーズで。ジム同様。損耗数が一年戦争末期の戦いに参加している。

ボールが支援機として採用された経緯については諸説あるが。有力と考えられているのが。当時まだ兵器としての過渡期にあったジムをフォローするために投入されたとする説や。定数不足を解決するための数合わせとして配備されたと言う説であろう。どちらにしても。当時の連邦軍はMSの支援兵器。もしくはMSの代用品の調達に追られていたようである。地上ではジェット・コア・ブースターやフライマンタに代表される航空機による爆撃等が期待できるが。宇宙戦ではMSを支援できる兵器は少なかった（宇宙戦闘機はMSに対して著しく不利であり、艦船にはMSに追随しての支援など望むべくもない）。

そこで、投入されることになったのがボールである。ボールはマニュピレーター付き作業ポッドに。RX-75ガンタンクのものと同クラスの威力を誇る180mm砲を搭載しただけと言っても過言ではない代物であった。だが。対MS戦において実績のある武装を装備したボールは。主に後方からの砲撃により支援機として使用される。運用される際は。密集体系で僚機と共に集中砲火を浴びせるという戦法を取ることが多かったようである。中には近接戦闘で敵MSを撃破したボールもいたと言うが。やはりそれは稀な例で。これと言った格闘兵器を持たず防御力も脆弱であったボールは。MSと戦闘になった場合。成す術もなく撃墜されるのが常であった（ザクⅡのキックで破壊された例もある）。一部では「鉄の棺桶」と揶揄されていたのである。

ボールの数少ない利点は。ジムよりもさらにコストが低く調達が容易なことや。様々な作業に使い易いことで。そのためかU.C.0083年においても改修型の運用が確認されている。ミノフスキー粒子下でも相変わらず。長距離砲撃戦を前提とするボールを大胆に採用し。使い続けるところに。人海戦術に頼る連邦軍の体質が垣間見れよう。

●データ：RB-79　●全長：6.8m　●本体重量：4.2t　●ジェネレーター出力：400kW　●武装：175mmキャノン砲

Terms of E.F.S.F. mobile suit

型式番号

ガンダムはRX-78、ガンキャノンはRX-77とモビルスーツは機種ごとに型式番号と呼ばれるナンバーを付される。一般的に、連邦軍のモビルスーツの型式番号は頭に「R」を記し、以下に機体の区分を置く。試作機、実験機には「X」を置き、それ以外は機体の略称を置く。例えば、ガンダムタイプの完全な量産型の略称は「GM」、ガンキャノンタイプの完全な量産型の略称は「GC」となり、ボールの量産機の略称は「B」となる。また各モビルスーツの派生系は数字の後に仕様を表すアルファベットや改修番号が付けられる。

ルナ・チタリウム(ガンダリウム)

チタン系超高張力合金に分類される一年戦争当時の新素材。耐熱性、耐蝕性、放射能絶縁性に優れ、高硬度で軽量というモビルスーツの装甲として最も適当な材質であった。しかし、ルナツーなどでしか精製できない技術的な難しさと、高価なレアメタルを使用する合金であることから、非常にコストが高いものとなった。一説によればこのレアメタルはルナツーでしか採掘できず、ジオン公国軍ではほとんど実用化できなかったと言われている。(ルナ・チタニウムの名称の由来もこの理由からとされる)。戦後、ジオン残党のアクシズはこの合金を用いて製作されたRX-78ガンダムを研究し、ガンダリウムαと名づけたようだ。

教育型コンピューター

RXシリーズの基幹となるコア・ファイターに搭載された自己学習機能を持つコンピューター。新しい状況に遭遇した場合、過去の状況より想定しうるケースを推論し、自分自身のプログラムを変更していく機能を持っている。これは光集積回路の採用によって可能になったとされている。従来のコンピュータよりも演算能力が高く、短時間で自己学習と推論、新規プログラムの作成が可能であった。ア・バオア・クーにおいて、アムロ・レイがRX-78の自動操縦を行い、MSN-02ジオングの頭部を狙撃しているが、これは教育型コンピューターの能力が発揮された好例といえる。

マグネット・コーティング

地球連邦軍のモビルスーツは関節駆動にフィールド・モーターと呼ばれる新型モーターを使ったシステムを採用していたが、そのレスポンスを向上させるために使われた新技術。フィールド・モーターにおけるメカニック的な干渉を打ち消すため、磁気成分によって可動部分をコーティングする。考案したのは当時、電磁工学の新鋭といわれたモスク・ハン博士で、ガンダムにこの技術を用いる際、彼自らが指揮をとったようだ。マグネット・コーティングはアムロ少尉の乗る2号機の前に、G-3と呼ばれるガンダムタイプへ試験的に施されたという説がある。

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0002

地球連邦軍兵器編

地球連邦軍の成立と変遷

地球連邦軍（以下「連邦軍」）設立の経緯は、旧世紀末の地球連邦政府成立時まで遡ることができる。その時代の連邦軍は、各国の軍事力を結集してより大きな軍事組織に編入することで成立していった。当然ながら、旧世紀末に宇宙移民は開始されておらず、そのため連邦軍も航空機や戦闘車輌、艦船といった地上戦力に拠っていた。しかし、宇宙移民が軌道に乗って人類が地球圏全体に拡がってもなお、「宇宙軍」と呼べるほどの組織は設立されなかった。初期のスペース・コロニーはあくまで"開拓地"であり、警察権以上の治安維持機構を必要としなかったためである。その状況に変化が生じたのは、U.C.0040年代から活発化したスペースノイドの自治権要求運動が原因だった。従来以上の強権誇示の必要性を感じた連邦軍は、U.C.0050年代に宇宙軍を設立。さらに0058年、サイド3の共和国宣言を受け、「60年代軍備増強計画」によって宇宙軍の統制・軍備再編が行われ、一年戦争開戦時における連邦軍宇宙戦力の母体が構築されるのである。なお、この宇宙軍は旧来の海軍組織を模倣して構成された　ソロモン海戦の指揮を執ったティアンム中将やジャブローの司令官であるゴップが「提督」と称されていたのは、ここに理由がある

連邦軍宇宙艦隊の編成と強化

U.C.0060年代における連邦軍の軍拡路線に拍車をかけたのが、0069年のジオン公国の誕生である。これに対してさらなる示威行為を以って対処すべきという気運を高めた連邦軍は、「70年代軍備増強計画」によって宇宙軍の増強を図った。この計画のもとで就役した宇宙戦艦が「サラミス級宇宙巡洋艦」と「マゼラン級宇宙戦艦」である。連邦軍は宇宙空間での艦隊戦をミサイルや実体砲弾、メガ粒子砲などを超長距離で撃ち合うものと想定し、これらの艦艇もそうした設計理念の元に設計されていた。大火力の弾幕で接近する敵機を迎撃し、追尾性の高い艦砲射撃で敵艦を的確に捉えて撃破するという"大艦巨砲主義"的な戦術に基づいていたのである。とはいえ、当面の仮想敵国であった公国軍との彼我戦力差は歴然であり、公国が開戦に踏み切るとは考えていなかった。たとえ戦争状態になったとしても、増強した宇宙軍によって短期間で公国軍を制圧できると予想していたのであろう。しかし、モビルスーツ（以下「MS」）とミノフスキー粒子という、従来の戦術を覆すシステムの出現によって、その意図は脆くも崩れ去ることとなる。

一年戦争緒戦の大打撃

戦艦、巡洋戦艦92隻、巡洋艦473隻、その他戦闘用艦艇620隻、補助艦艇1340隻。以上が、一年戦争開戦直前における連邦宇宙軍の戦力であったという資料が残されている。その数を比するなら公国軍の5倍近くにも及んでいた。しかし、U.C.0079年1月3日の公国の宣戦布告から始まった「一週間戦争」と、その直後に発生した「ルウム戦役」において、連邦宇宙軍はその戦力差を覆されて壊滅的な打撃を受けることになる。これら一連の戦闘では、公国軍のミノフスキー粒子散布という新戦術によって、連邦軍艦艇の優位性であるはずだった電子戦兵装は無力化され、迎撃システムの機能を失った連邦艦艇はMSの機動性の前に成す術もなく敗退していった。さらに、連邦軍と公国軍の戦術的練度の差も、その被害に拍車をかけたといえる。"ミノフスキー粒子散布下でのMSによる有視界戦闘"という新戦術を確立していた公国軍に対し、事前にそれらの情報を入手していたにもかかわらず具体的な対策を講じずにいた連邦軍の事実認識の甘さが露呈したのである。結果として、連邦宇宙軍の主力であった第1連合艦隊はルウム戦役を契機に瓦解し、制宙権は公国軍のものとなっていった。

ビンソン計画の発動

一週間戦争とルウム戦役でその宇宙戦力の大半を失った連邦軍は、「V作戦」(後述)によってMS運用を前提とした戦術システムの確立を目指すと同時に、疲弊した宇宙艦隊の再建を目的としたプロジェクトを発動した。これが「ビンソン計画」である。この計画によって、改修を受けたサラミス級とマゼラン級がジャブローにおいて建造され、徐々にではあるが艦隊の再編が進められていった。しかし、これはMSという新たな兵器体系に完全に対応したものではなかった　事実、計画の過程で建造されたサラミス級とマゼラン級には一応のMS搭載能力が備えられたものの、MSの運用を可能にしたものではなかった。一週間戦争とルウム戦役で公国軍のMSを目の当たりにした人々は、その脅威を十分に感じていた。その最たる例がレビル将軍であり、「V作戦」は彼の強力な働きかけによって実現したといっても過言ではないだろう。その一方で、旧来の戦術から脱却しきれない勢力によって進められた計画が「ビンソン計画」であった　ここに連邦軍首脳部の意見対立が窺えるのである。

V作戦

一週間戦争とルウム戦役の大敗を受け、MSの重要性を痛感した連邦軍首脳部の一部が推し進めた計画が、U.C.0079年4月1日に発動された「V作戦」である（ちなみにV作戦の"V"はVictory（勝利）の頭文字を意味し、連邦軍の必勝を期する意気込みが込められている）。この計画は、MSの開発・量産とその母艦となる強襲揚陸艦の開発・建造によって、それを統括して運用する新たな戦術システムの構築という性格を帯びていた。しかし、V作戦は決して無からスタートしたものではなく、その母体となるプロジェクトの元に成り立っていた。それがU.C.0078年3月にスタートした「RX計画」である。

連邦軍は一年戦争開戦以前から、公国軍が開発した巨大人型兵器の存在を察知していた。その実用性に疑問を感じつつも、対抗措置を講じるべきだと判断した連邦軍首脳部は、極秘裏に巨大人型兵器を模索しており、あるいはその対抗兵器の開発計画「RX計画」を発動させる。これには、実像が明らかではないMSという兵器の研究という側面も含まれていた。そのためこの計画は、既存の兵器開発とは異なり、民間の研究団体や技術者も参画した複数のプロジェクトの同時進行という形で進められることとなった。そのなかには、継続して公国軍MSの情報収集を目的とした諜報活動も含められていたのである。

しかし、RX計画は各々の分野である程度の成果を挙げたものの、結実を迎えたかというとそうとは言えない。結局、計画の過程で完成した兵器はRTX-44（後のガンタンクの原型機）とRXM-1のみであった。コア・ブロック・システムと救育型コンピュータの発想の誕生や、ルナ・チタニウム合金の開発成功など、数々の研究成果を提出した計画も、それを統括すべき連邦軍首脳部が確固たる指針を示せずにいたのである。これを統合する指針となったのが、開戦後に発動された「V作戦」だったのだ。

「RX計画」で蓄積された数々の基礎研究によって、「V作戦」のMS開発は順調に進んだ。7月にはRX-77ガンキャノンとRX-78ガンダムが完成。これらとRTX-44をリファインしたRX-75の3種類のMS（RXシリーズと称される）は、特化した機能を組み合わせることで柔軟な運用を可能なさしめようとする連邦軍の戦術思想であった。さらにRXシリーズの中心となり、"強襲部隊"として機能するための母艦となるホワイトベース級強襲揚陸艦（資料によってはペガサス級強襲揚陸艦と分類されることもあるが、本書ではこの表記で統一する）が就航。連邦軍が緒戦の敗北に学んで揃いた"MS運用を盛みた戦術システムの構築"は、ここに一応の完成をみるはずであった。しかし、サイド7・1バンチでの最終トライアルを終えたRXシリーズを受領するためにジャブローを発ったホワイトベース級1番艦（以下〈WB〉）が公国軍部隊に発見されたことによって、その予定に狂いが生じることになる。史上初のMS同士の実戦となった、9月18日の「サイド7遭遇戦」を機に〈WB〉隊は士官候補生と民間人たちによって運用され、実戦に参加していくこととなる。

モビルスーツの量産

RXシリーズとホワイトベース級強襲揚陸艦が本来の意図とは異なる形で実戦に参加する一方で、V作戦」のもうひとつの根幹であるMSの量産についても計画は進行していた　しかし、ここでひとつの問題が浮かび上がった　作戦の初期に開発されたRXシリーズは、特化した機能を追及するあまり、パーツ単位での互換性を少ししか持ち得なかったのである　そうした問題によって生じる規格の差異は、整備性を低下させる要因となり、兵器の量産という観点から見ると大きなデメリットとなっていた　これらの問題点が是正される一方で、10月以降にはシャフローでは量産MS、RGM-79シムの本格的な開発・生産が開始される　この運用には、前述の〈WB〉隊からの戦闘報告がフィードバックされ、さらに11月下旬に〈WB〉がシャフローに到着すると、RX-78のテ　タが回収され、以降のMS開発・生産に生かされることとなった　こうして量産体制にこぎつけたRGM-79だったが、過度の生産期間短縮とコストダウンによって"粗悪品"と称されるほどの代物（一般には「先行量産型」と呼ばれる）であった　しかし、連邦軍はその生産力の高さを武器に生産を続け、戦線に投入していったのである。

一年戦争末期

数を揃えて物量で公国を圧倒するという目的のために開発されたRGM-79だったが、その基本設計は確かであった。その基本設計を忠実に生産されたものが「後期生産型」と呼ばれるRGM-79である。この後期生産型には〈WB〉隊で運用されたRX-78の実動データが活かされ、改良が加えられていた。しかし、生産が進められたのが一年戦争終結間際であったこともあり、後期生産型は補充あるいは新規配備という形で運用されることとなった。こうした形態は実戦テストの意味合いを含んでおり、得られたデータを反映させた量産体制の確立が、連邦軍首脳部の意図にあったと考えられている。事実、一年戦争終結後には、後期生産型は主力MSの一翼を担い、80年代の量産MSの基礎となっていったのである。

コラム　連邦軍モビルスーツのバリエーション

「V作戦」によって誕生したRXシリーズとRGM-79には、さまざまな派生機が存在している。なかでも経緯が特異なものが、陸軍省も関わっていたRX-79(G)陸戦型ガンダムとRGM-79(G)陸戦型ジムであろう。この二種は、ろくなデータも採らないまま陸戦機に特化して生産された先行量産機であり、そこには、公国軍の地球侵攻作戦によって地上の大半を制圧され、対抗兵器としての陸戦用MSが必要となった事情があった。そのため兵器として未成熟であるにもかかわらず、RX-79(G)とRGM-79(G)が急遽開発されたのである。また、一年戦争末期に生産されたRGM-79後期生産型にも、局地戦仕様の派生機が多く誕生している。RGM-79D、RGM-79Gなどがその代表的な例である。こうして多くの派生機が生まれたのも、RXシリーズとRGM-79の基礎設計が優れたものであったためであろう。事実、これらのMSが戦後の連邦軍を支えていくことになるのである。

連邦宇宙軍のMS小隊編制

連邦軍では、MSは既存の宇宙戦闘機や戦闘車輌に代わる戦闘兵器として認識されていた。そのため、既存の概念に従った運用がなされ、これまでの兵器体系をMSに置き換えていくという形で配備が進められていった。宇宙戦闘においては、5機のMSで編制された小隊規模を基本としていた。一般的なRGM-79小隊を例に取ると、その編制は以下の通りである――通信・指揮装備を拡張された隊長機1、通常型3、中距離支援用1。ただし、予定では中距離支援用MSにはRGC-80ジム・キャノンが運用されるはずであったが、実際にはRGC-80の量産が遅れたことから、バズーカを携行したRGM-79がその役割を代行することがほとんどであった。3機編制の公国軍MS小隊に対して連邦軍の小隊編制数が多いのは、数の優位によって公国軍を凌駕しようとする連邦軍の基本戦略がその背景にあった。一方で、初期に生産されたRGM-79先行量産型が予定されたスペックを発揮できず、数で上回らなければ公国軍のMSに対抗し得ないという現実的な事情も存在したのである。

ア・バオア・クー攻防戦のMS戦術

一年戦争における大規模な宇宙戦は、ソロモン攻略戦とア・バオア・クー攻防戦のみである。その双方において連邦軍は、集団戦法（グループ戦法とも呼ばれる）を前提としてMSを運用した。12小隊が1中隊を編制し、10～20小隊のRB-79部隊と共同で作戦を遂行、近距離戦闘をRGM-79のMS中隊が、中・遠距離支援をRB-79が担当していた。練度と性能で公国軍に劣る連邦軍は、この集団戦法を以って性能で勝る公国軍MSに対抗しようとしたのである。しかしながらア・バオア・クー攻防戦では、ソーラ・レイの直撃によって戦力の3分の1を失っていた。そのため、連邦軍が頼みとする物量の優位性は失われ、想定外の苦戦を強いられることになった。余談となるが、RXシリーズが配備されていた〈WB〉隊については、その性質から前述の集団戦法とはやや異なる運用がなされていた。同隊はア・バオア・クー攻防戦の時点で、RX-78×1、RX-77×2、FF-X7Bst×1の4機編制小隊で遊撃任務に就いたといわれている。

ア・バオア・クー攻防戦序盤のMS展開

ア・バオア・クー攻防戦において連邦軍は当初、バブリによるビーム攪乱幕形成で公国軍のビーム砲火を防ぎつつNフィールドより第2、第3大隊を前進させる戦法をとった。しかし、ア・バオア・クーからのミサイル攻撃によってその意図を挫かれたため、想定よりも早い段階でMS部隊を展開せざるを得なくなる。艦隊がクロス・ポイントを突破する以前にMS部隊を展開することは、より大きな被害を強いることに他ならなかったが、ア・バオア・クーへの上陸を成功させるためには止むを得ない判断だったといえるだろう。これによってNフィールドでは消耗戦が展開され、MS部隊の被害は増えていくことになる　一方のSフィールドでは、ルザル艦隊が初期段階からMS部隊を展開して密集陣形による正面突破を図った。こちらのMS部隊は、ア・バオア・クーからの対空砲火と第34MS隊を中心とする公国軍MS部隊に前進を阻まれることとなる。

攻防戦の趨勢を決したMS部隊の活躍

ア・バオア・クー攻防戦でもっとも活躍を見せたMSは、やはり〈WB〉隊のRX-78であろう。Sフィールドのルザル艦隊に組み込まれた同機は、Sフィールドの公国軍防空部隊を突破し、ルザル艦隊突入の血路を開くことに成功している。その進攻を追うように、ルザル艦隊のMS部隊も撃沈した"ドロワ"を盾にしてア・バオア・クーへの上陸を果たしている。Nフィールドに投入された第2、第3大隊よりも戦力の少ないルザル艦隊が、前者に先んじて要塞への上陸に成功した一因が、これらのMS部隊の活躍にあることは明らかであるだろう。また、NフィールドのMS部隊もギレン・ザビ暗殺の混乱に乗じる形で上陸に成功している。Nフィールド防衛の中心となった公国軍MS-14Aゲルググ部隊の働きが鈍かったことも、上陸成功に拍車をかけた要因といえる。こうして、MS部隊がア・バオア・クーへの上陸に成功したことで、連邦軍の優勢が決定的なものとなっていったのである。なお、ア・バオア・クー攻防戦に参加した約4800機のMS（RGM-79、RB-79の双方を含む）のうち、戦闘終了後に帰還したMSは800機に満たなかったとされている。いかにこの攻防戦が激戦であったかを示すデータといえよう。

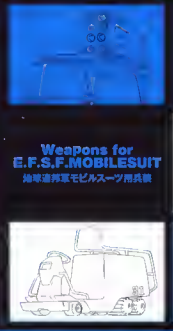
基本兵装

連邦軍が作り上げた“矛と盾”のスタンダード

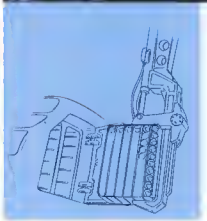
ビーム・サーベル、シールド、バルカン砲などの連邦製MSの基本兵装は、すべてがガンダムから派生したもの――と言うより、ガンダムの基本兵装そのものだ。これら（特にビーム・サーベルとシールド）は、白兵戦闘兵器というMSの本質をいささかも踏み外しておらず、少々の性能の差開はあっても、以後に開発される主力MS用の基本武装となっている。ビーム・サーベルを使った接近戦、シールドによる防御――ガンダムが開発された時点で、MSの基本的な装備は既に決定していたのだ。一連の戦争やルウム戦役でMSの絶大な威力を身を持って知りながらも、その後も大艦巨砲主義への傾倒が見られたことや、ガンタンクやガンキャノン、ボールと言った砲撃戦専用機の開発等から、MSに対する理解不足を指摘されることが多い一年戦争時の連邦軍だが、総論としては彼らがガンダムで出した回答は間違っていなかったのである。

白兵戦闘に特化した標準装備

連邦製MSの基本兵装の中でも、固定武装と呼べるビーム・サーベルとバルカン砲は至近距離戦、格闘戦用の兵装である。MSにおける格闘戦は、お互いの背後を取り合う戦闘機の格闘戦＝ドッグ・ファイトとは異なり、人対人の格闘戦＝グラップルや剣闘に近いものだ。そのMS同士の剣闘における剣として、連邦軍が開発したのがビーム・サーベルである。ビーム・サーベルは、ジオン製MSが装備するヒート系格闘兵器よりも高い威力を持ち、容易にMSに致命傷を与える。敵機からの斬撃だけでなく、至近弾や衝突など、射撃戦よりも高いリスクが付きまとう格闘戦において、一撃必殺の戦力を秘めたビーム・サーベルは、連邦軍のMSに大きなアドバンテージを与えていたのだ。また、主に接近防御兵器として使われるバルカン砲により、敵機の急激な斬り込みや、間合い外からの格闘攻撃にも対処し易くなっているのも、連邦製MSの特徴であると言える。これらの装備の有効性は実戦で証明され、以後の連邦製MSだけでなく、他系統の機体の標準装備となることも多かった。



頭部バルカン砲



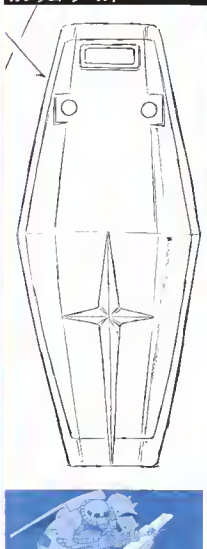
多くの連邦製MSに搭載された機関砲で、頭部への内蔵式となっている。口径は60mmとする説が一般的である。

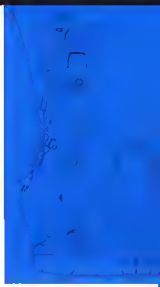
他のMS用実弾兵器と比べて口径が小さく連射能力に秀でるため、敏目標への攻撃や掃射、弾幕により敵機を近づけさせない近接防御兵器として使用されることが多い。どのような経緯で、頭部にバルカン砲が装備されたかは良く判っていないが、バルカン砲を内蔵した頭部は旋回砲塔のように使うこともできるため、近接防御力や柔軟性能は、胴体固定式よりも高くなっていると言えよう。

対MS用としては役者不足の感があるバルカン砲であるが、至近距離で連射を浴びせれば、ザク程度なら撃破可能であったらしい。実際、アムロ・レイ少尉はバルカン砲でリック・ドムさえも撃破したことがあったと言う。

余談だがバルカン砲という名は、旧世紀において航空機搭載用機関砲の代名詞的存在であったM61Aヴァルカンのものを踏襲したという説が有力である。

ガンダム・シールド





MS用の「盾」かシールドで、言わば手持ちの増加装甲である。様々な素材や処理が施されてはいるが極論すれば「鉄板」であり、フルアーマー・システムや機体改造に頼らずにMSの防御性能を向上させる最も簡素な装備となっている。ビームに対しては対ビーム・コーティングの被膜分の防御力しか持たないが、実体弾には充分な耐弾性を発揮するため、主兵武装が実弾兵器のジオン製MS相手には特に有効であった。ザク・バズーカやジャイアント・バズなどの大口径兵器の直撃を受けると、流石にシールドは破壊される可能性が高いが、MS本体はほぼ無事であることが多く、生存性を格段に向上させている。アムロ・レイ少尉のガンダムも、シールドで何度も危機を脱している。

ガンダムが装備したものは俗にガンダム・シールドと呼ばれるか、ジムのシールドもほぼ同じ規格で作られており、同等の防御性能を持つと考えていいだろう。

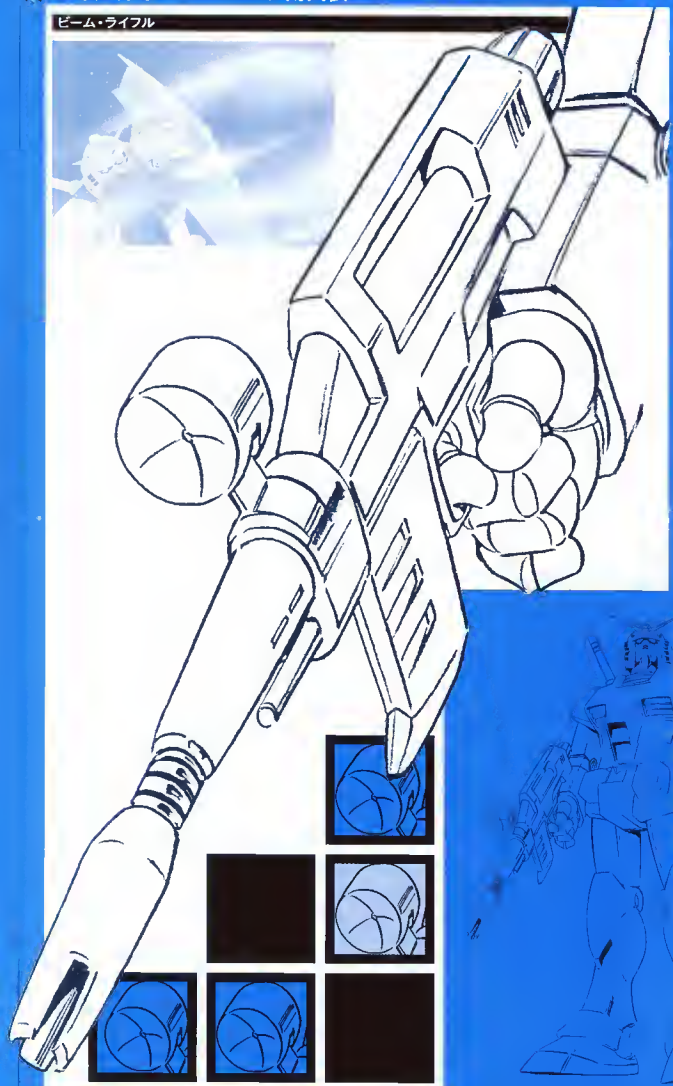
BASIC weapons

地球連邦軍がMS用格闘装備として開発したのか、カンダム系列機やシムス系列機で採用されたビーム・サーベルである。ビーム・サーベルは、最長は1機1の基分だけのコンパクトなテハイスてあるが、稼動時には長大なビーム刃を発生させる その破壊力は強大てあり、MSの装甲のみならず、艦船の航行機構すらも易々と切り裂いた 携帯性と攻撃力に優れたビーム・サーベルは、以後に開発されるほとんどのMSに搭載されることになる

宇宙世紀のビーム＝メカ粒子と言う印象が強いが、ビーム・サーベルのビーム刃はメカ粒子ではなく、超高干渉のミノフスキー粒子で構成されている これはビーム兵器の大幅な小型化を可能にした エネルキーCAP技術により実用化されたものてあった

カンダムのビーム・サーベルは現場での調整でビーム・シャベリンというビームの槍としても使用可能たか、シムのものは、この機能かオミットされていたようである

ビーム・ライフル



ガンダムの主軸武装で、連邦軍が開発した最初期型のビーム・ライフル。すべてのビーム・ライフルの祖祖的な存在で、後に登場したMS携行用ビーム兵器は多かれ少なかれ、これの影響を受けていると考えるのが妥当であろう。

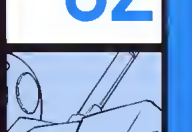
その火力は「戦艦の主砲並み」と評され、実際このビーム・ライフルで撃破されたターゲットの多くが、たった一発の命中弾によって破壊されていることからも、その評価が正しいことが理解できよう。また、ライフルと言うよりカービン銃を連想させるコンパクトな形状からは、連邦軍の高い技術力だけでなく、ガンダムが白兵戦を強く意識したMSであり、ビーム・ライフルもそれに合わせて設計されていることも推察できる。

ガンダムはこの兵器によって様々なMSや艦艇を沈めたが、ア・バオア・クー戦でシャア・アズナブル大佐のシュツルムを撃破したのも、このビーム・ライフルであった。また、同型のライフルを装備したシムも確認されている。

BEAM weapons

Weapons for
E.F.S.F.MOBILESUIT
地球連邦軍モビルスーツ用兵装

02



ビーム系兵装

ビーム・スプレーガン

ジムの標準装備となったビーム兵器。量産効果を上げるためか照準センサーやフォア・グリップなどは除去されており、簡易型ビーム・ライフルと言うへき式銃になっている。砲身が極めて短くビームが拡散しやすいので、中距離以降での信頼性に欠けるが、近距離以内での命中精度は高い。このためMSに慣熟していない連邦軍のパイロットであっても、比較的容易に命中弾を得られる利点があった。

ビーム兵器としては出力が弱い部類に入るものの、単体でジムを運用すること自体が少なく、またボール等の支援があったこと、地上と比べてビームの減衰率が低い宇宙戦に投入されたこともあって、致命的な欠点とはならなかったようである。

ソロモン攻略戦やア・バオア・クー戦で相応の活躍を見せたビーム・スプレーガンだったが、戦後には主力兵装の座から降りており、後継のジム・シリーズはフルバル・タイプのビーム・ライフルを装備することになる。

ガンキャノン用 ビーム・ライフル

ガンキャノン用に開発されたビーム・ライフル。スイングアウト式の照準サイトと、ガンダム用と比べて大型のフォルムが特徴である。その形状やガンキャノンそのものの仕様から、ガンダム用ビーム・ライフルよりも火力と中距離以降での射角調整に優れ、連射性能と近距離以内での自動調整、発射可能回数であるといったことが予想される。

いかにビーム・ライフルが強力とは言え、2門のキャノン砲を持つガンキャノンには、ライフルは過剰な装備であるとする意見もある。だが、比較的近い距離で敵機と交戦する場合、腕の動きだけで広い射界が得られるビーム・ライフルは、ガンキャノンの低い機動性をフォローする装備となるため、やはり扱った方がいいだろう。

ガンキャノンはその型式番号から、ガンダムよりも先にビーム・ライフルを装備したと思われることがあるが、実際にはガンダムの方が早い時期にビーム・ライフルを搭載したようである。

MS携行型メガ粒子砲の誕生

連邦製MSとジオン製MSの最大の格差となったのが、連邦軍が先じて実用化したMS携行用メガ粒子砲＝ビーム・ライフルである。

メガ粒子砲は艦隊の主砲として使用されていることがらも理解できるように、通常兵器としては最強クラスの火力を持つ存在である。逆説的に言えば、当初は艦船クラスのプラットホームがなければ運用できなかったのだ。このメガ粒子砲を機動兵器に装備可能なまでに小型化できれば、兵器体系に革命が起こることは容易に想像できよう。

ごく単純に説明するなら、メガ粒子を発生させるにはミノフスキー粒子を圧縮してやればいいのだが、この過程を行なう機器は巨大なもので、これがメガ粒子砲が大型プラットホームでしか使用できない理由であった。当然、MSを生み出したジオン公国もメガ粒子砲の小型化に取り組んだが、作業は難航した。そんなジオンを尻目に、メガ粒子砲の小型化に成功したのは、地球連邦軍であった。連邦軍はメガ粒子化直前のミノフスキー粒子を蓄積できる、エネルギーCAPと呼ばれるデバイスを開発。つまり、自前で「弾丸」を作るのではなく、別の場所で作った「弾丸」を銃にこめておくシステムを作り上げたのだ。このエネルギーCAPの技術によりコンパクトなメガ粒子砲、ビーム・ライフルが完成。RX-78に装備され、ジオン軍を恐怖に陥れることになったのだった。

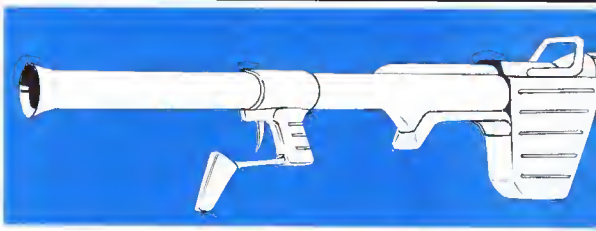
ジオン軍のMSを追い詰めるビーム兵器

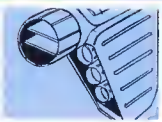
巡洋艦の装甲をも易々と貫通するビーム・ライフルの登場は、それまでの装甲防御策を一挙に陳腐化した。艦艇のメガ粒子砲がMSに命中する可能性は低いが、MSが持つビーム・ライフルならば話は違ってくる。MSはMSを捕捉できる以上、ビーム・ライフルはMSに命中するのだ。有効距離内でビームが直撃すれば、一年戦争期のMSは一撃で撃破される。装甲の増厚やシールドで対応できるレベルの問題ではない。Iフィールド・バリアや対ビームかく乱幕と言った特殊な防御策があれば防ぐことはできるが、一年戦争においてそのような装備を持つ機体は、特例中の特例である。連邦軍は、ほとんどのMSにビーム兵器を装備することで、ジオン製MSに対して優位に立ったのだった。

ハイパー・バズーカ

ガンダムやジムが装備したMS用ロケット・ランチャーで、破壊力はビーム・ライフルにこそ劣るが、対艦戦用や対要塞戦用だけでなく対MS用として充分な攻撃力を発揮する　サイズが大きく取り回しが悪い、装弾数が7発しか込められない等の欠点はあるものの、距離によって威力が左右されない、確実性が高い兵器である　ガンダム2号機のパイロット、アムロ・レイ少尉は戦場を見極めてビーム・ライフルとハイパー・バズーカを使い分けたと言われる　実戦アー・バオア・クー戦において、レイ少尉のガンダム2号機は2門のハイパー・バズーカを装備して出撃しており、その信頼の程を窺い知ることができる

総合的な性能をビーム・ライフルと比較した場合、至近～近距離ではライフルが優れ、中距離ではほぼ互角、遠距離でハイパー・バズーカが優位と言った図式が予想できる　ヒーム・スプレーガンとの比較では、至近～近でスプレーガン、それ以降ではバズーカが有利であろう。





キャンノン砲（ガンキャノン）

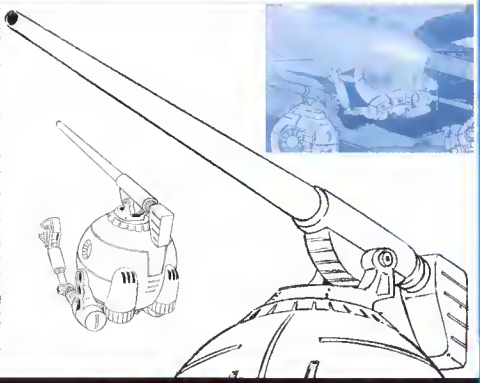
ガンキャノンの固定武装として知られるのが、両肩に装備された240mmキャノン砲である　MS用の固定式火砲としては最大級の口径を誇り、頑強な外装を持つ水陸両用MSであっても大破させる威力を持っていた　さらに、低反動型的な構造であったため機体にかける負担が少なかった上、サウ・マシンガン並みの連射も可能であるなど、極めて理想的な火砲であった（唯一の欠点は、機体正面か上方しかフォローしておらず、射界が不自由であったことであろう）　ジオン軍もその性能を恐れ、ホワイト・ベース隊と交戦した部隊はガンダムだけでなく、ガンキャノンのキャノン砲も撃滅しなくてはならなかった

この砲は2種類の射撃モードがあったらしく、左右の砲を同時発射する場合と、交互に連射する場合があった　同時発射はMS等のハード・ターゲットを撃破するために使用され、交互連射は対空攻撃に使われることが多かったようである

WARHEAD Weapons

長距離支援用MS、RX-75ガンタンクに装備された120mm低反動キャノン砲と同等の機能の装備、優れた弾道特性を予想させる長砲身砲は、支援機としての役割を期待されてボールには、最適なウェポンであろう。ガンタンクでは2門装備されていたか、コスト・ダウンのためかボールでは1門のみの採用となっている。若干火力不足とも考えられるが、ボールそのものが集団戦前提の機体であるため、問題とは受け止められなかったのだろう。

ボールのキャノン砲の最大の特徴は、旋回式のターレット上に設置されていることである。ガンタンクやガンキャノンに代表される支援型MSのキャノン砲は、胴部水平に固定されていることが多く、敵機を正面に捕捉しない限り攻撃不能だった。しかし、ボールはターレット上にキャノン砲を装備しているため、理論上機体の旋回なしで360°の目標を攻撃可能となっている。キャノン砲を頂頂部に備えられたボールならではの自由度であろう。



03

Weapons for
E.F.S.F.MOBILESUIT
地球連邦軍モビルスーツ用兵装

実弾系兵装

継続性に秀でる武装

ビーム・ライフルの開発で、ジオン公国に対して武装面のアドバンテージを得た地球連邦軍だったが、実弾兵器を軽視していた訳ではない。ビーム兵器には高い火力の他に、皆無に近い発射反動や、発射回数(装弾数)の多さなどのメリットがあるが、実弾兵器にもビーム兵器にはない利点があるため決して優れることはなかった。

そのひとつが信頼性である。この場合の継続性とは、主に命中時にターゲットに与える複合的なダメージのことだ。ダメージの安定性と換言できるかもしれない。ビーム兵器は火力こそ高いものの、目標の主要部分(MSなら胴体)に命中させないと効果が薄い傾向がある。主実部に命中弾を与えれば、高確率で誘爆が期待できるが、それ以外の箇所の場合、その部位を使用不能にはできるが、副次効果(機体に与える二次被害や、パイロットの負傷やパニック効果)は薄い。これは、ビームの指向性=貫通力が極めて大きいことや、「点」でダメージを与える特性があることが原因であろう。これに対してハイバー・バズーカなどの実弾兵器は、貫通力こそビームに劣るものの、命中時に発生する大きな衝撃や、砲弾片の飛散等による二次被害が期待でき、これがダメージの安定性に繋がるのだ。ビーム兵器を「点」で刺突する槍に例えるなら、実弾兵器は「面」で叩き潰す鎚と考えられよう。

"愚機の武器"としての実弾兵装

信頼性の他にも、大気圏内での威力の減衰がない(少ない)等のメリットを持つ実弾系兵装であるが、必ずしもそのメリットだけを評価されて装備されるわけではない。ザクⅡがそうであるように、技術的問題や運用上の都合等から主軸武装に実弾タイプの兵装を選択する場合がある。連邦軍機ではガンタンクやボールがそれに該当する。実弾系兵装は、"愚直"の武装としての一面もあるのだ。

だが"愚機の武器"と言えども、その威力は侮り難い。ガンダムやガンキャノンが前面を務めていたとは言え、ガンタンクは火砲で多くの敵機を撃破し、ボールも支援機として相応の戦果を上げているのだから。支援機のメイン・ウェポンに、徹底して実弾兵器を採用した連邦軍の判断は、正解だったと言っていいだろう。

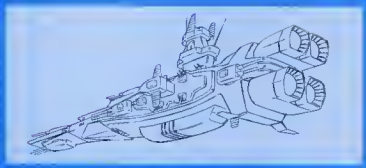
連邦軍が誇る主力戦艦

「70年代軍備増強計画」によって就役した連邦宇宙軍の主力戦艦で、7門の2連装メガ粒子砲やミサイル・ランチャーなど、当時としては最大級の火力を有していた。さらに、高度な電子制御技術を用いた「ファランクス・システム」を採用しており、コンピュータ制御によって確実に敵を迎撃することが可能であった。このようにマゼラン級は、ファランクス・システムの弾幕で近接防御を行いつつ、大火力の艦砲射撃で敵艦隊を撃破するという連邦軍の基本戦術に則って設計された艦であった。しかし、ミノフスキー粒子散布下でのMSによる攻撃に対してはその真価を発揮することができず、ルウム戦役では多くのマゼラン級が公国軍の前に苦汁を舐めることとなった。なお、マゼラン級は大気圏突入能力を有してはいないが、艦体底部に大気圏突入カプセルを装備している。

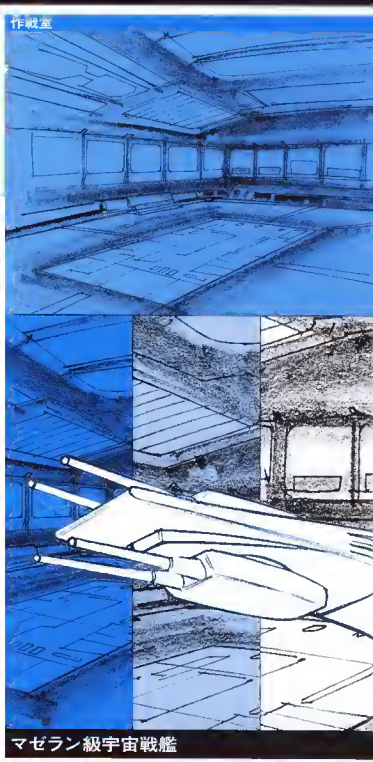
その後「ビンソン計画」において、ふたたび建造されたマゼラン級であったが、依然としてMS運用を踏まえた有視界戦闘に対応しきれてはいなかった。格納庫の一部を改修してMSが搭載可能にはなっていたものの、その運用まで考慮に入れた設計ではなかったのである。改修後のMS搭載数は4機であったとされているが、一説には6機や9機、12機ともいわれている。さらには、搭載能力自体がなかったとする意見も存在している。これは、ソロモン攻略戦や星一号作戦において、艦体にMSを貼り付けるように搭載していた艦があったことからであろう。

マゼラン級では、ルウム戦役に参加した第1遠合艦隊旗艦"アナンケ"や、チェンバロ作戦に参加した第2遠合艦隊(通称"ティアンム艦隊")旗艦"タイタン"などが有名である。ア・バオア・クー攻防戦に参加したマゼラン級では、レビル将軍の乗艦となった第1大隊(通称"レビル艦隊")旗艦"フェーベ"がその名を知られている。

01
Vessels of E.F.S.F.

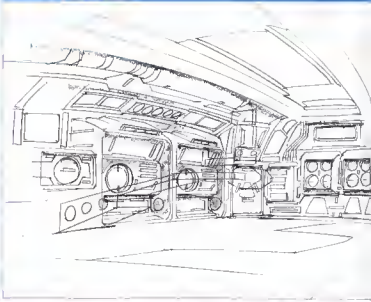


作戦室



マゼラン級宇宙戦艦

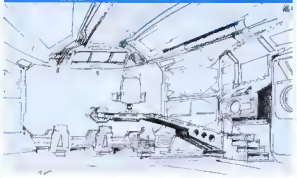
ブリッジ後部右側面



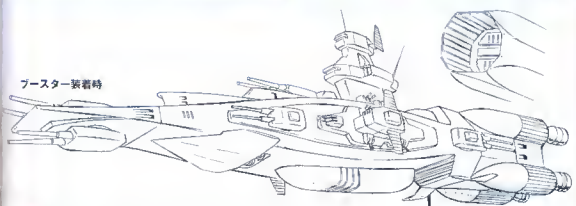
MAGELLAN class

ブリッジ

ブリッジ前部

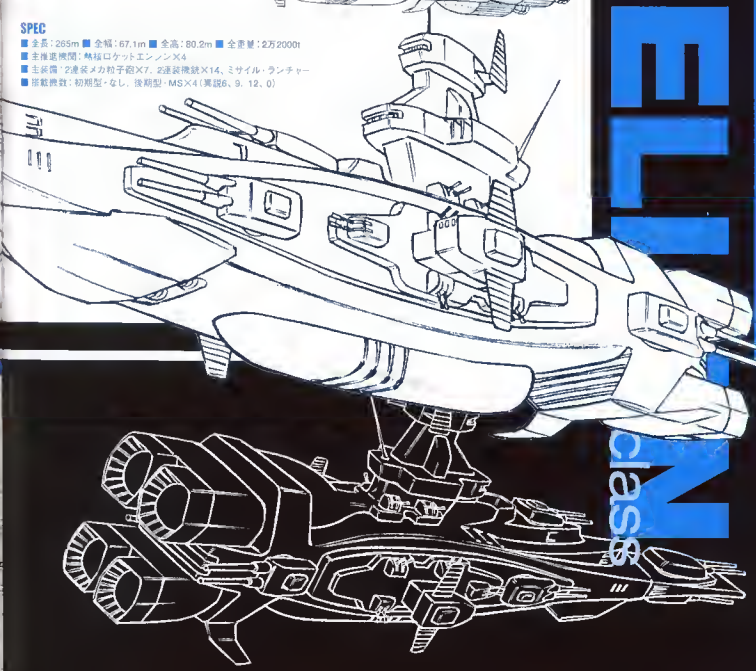


ブースター装着時



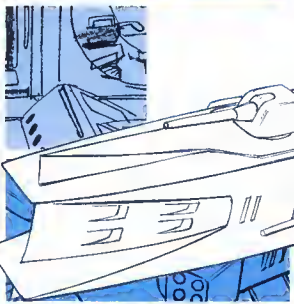
SPEC

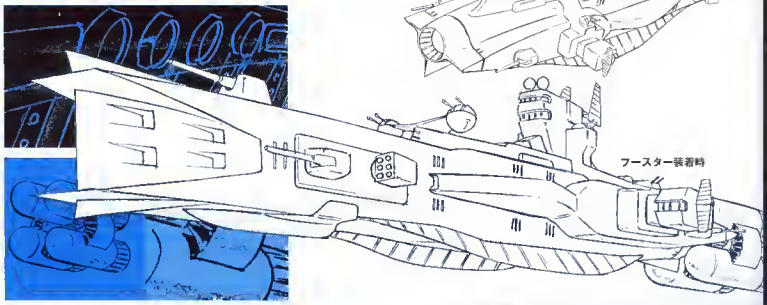
- 全長：265m ■ 全幅：67.1m ■ 全高：80.2m ■ 全重量：2万2000t
- 主推進機関：熱核ロケットエンジン×4
- 主兵装：2連装メカ粒子砲×7、2連装機銃×14、ミサイル・ランチャー
- 搭載機数：初期型・なし、後期型・MS×4（実設6、9、12、0）



SPEC

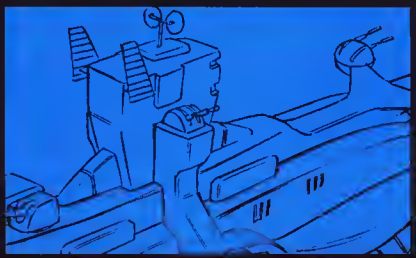
- 全長：228m（舞鋭288m）
- 全幅：68.3m
- 全高：61.3m
- 全重量：2万2000t
- 主推進機関：熱核ロケットエンジン×4（初期型をプラズマ推進エンジンとする舞鋭あり）
- 主装備：単装メガ粒子砲×6、2連装機銃×6、6連装ミサイル・ランチャー×2
- 搭載機数：初期型・なし、後期型・MS×4（舞鋭0、3、6、8）

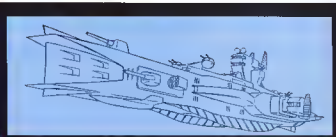




フースター装着時

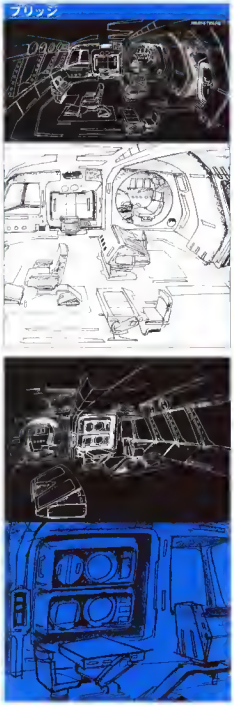
サラミス級宇宙巡洋艦





SALAMIS class

ブリッジ



連邦宇宙軍を支えた宇宙巡洋艦

マゼラン級と同じく、「70年代軍備増強計画」によって就役した宇宙巡洋艦。火力としては公国軍のムサイ級軽巡洋艦と同等とされるが、マゼラン級同様「ファランクス・システム」が搭載されており、6基の2連装機銃とミサイル・ランチャーによって接近するミサイルや敵機を殲滅する性能は、公国軍の艦艇に比べて優れていた。しかし、ミノフスキー粒子散布という新戦術の前にこのシステムはほとんど意味を成さず、ルウム戦役では公国軍MSにほとんど反撃することもできず撃沈されていったのである。一説には、同クラスの公国軍艦艇に比べて40%ほどの戦闘能力しかなかったとさえいわれている。

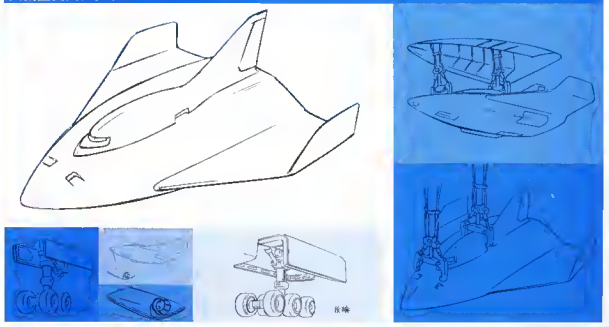
ルウム戦役の大敗を受けて「ビンソン計画」で建造された改修型のサラミス級（後期型、もしくは航空巡洋型と呼ばれる）も、MS運用能力は皆無であった。通常の格納スペースにMSを搭載することは可能となっていたが、こと運用という面においては、公国軍の艦艇に比べてあまりに貧弱な代物であった。ただし、艦体の設計自体は汎用性に優れていたため、防空型や偵察型など、外見はまったく同じでも用途が異なる艦も存在していたとされる。

一年戦争に投入されたサラミス級でよく知られる艦としては、星一号作戦でレビル艦隊に随伴していた“サフラン”や“シスコ”などがある。前者はソーラ・レイの直撃を免れた数少ない艦艇のひとつで、一方の後者はソーラ・レイの被弾を受けた艦である。

マゼラン級と同じく大気圏突入能力は有しておらず、艦体底部の突入用カプセルによって大気圏内外を結んでいた。また、改修型はシャプローにおいて建造され（マゼラン級の後期型も同様にシャプローで建造された）、大気圏突破用のブースターを用いて宇宙へと打ち上げられた。これは、制宙権を公国軍に奪われ、ルナツーなどの拠点だけでは艦艇を増えることが困難だったためである。

02
Vessels of E.F.S.F.

大気圏突入カプセル



03
Vessels of E.F.S.F.

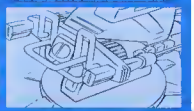
SPEC
- 全長：262m（異説250m）
- 全幅：202.5m（異説として翼を含み106m、110.8m）
- 全高：93m（異説97m）
- 全重量：3万2000t（異説6万8000t）
- 主推進機関：4連装熱核ハイブリッド・エンジン・システム×2、ミノフスキー・クラフト・システム（出力／56万馬力　最高速度／マッハ12）
- 主装備：880mm2連装主砲（異説580mm2連装主砲）、2連装メガ粒子砲×2
  前面ミサイル発射装置×24（異説3連装ミサイル発射装置）
  誘導ミサイル発射装置×6（異説、小型ミサイル×36）
  対空機銃座×35以上（異説、対空機銃座×18、20mm2連装対空砲座×32）
- 搭載機数：MSX3（異説6、9、12、15）
  航空機搭載機数＝ガンペリー、コア・ファイター×6
  コア・ブースター×2（異説Gファイター×2）

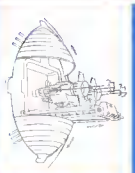
連邦軍初のMS母艦

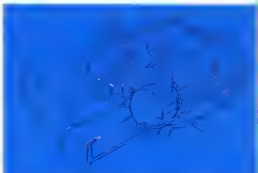
「V作戦」の過程で建造された宇宙艦であり、連邦軍で初めてMSの運用を前提に設計されている。しかし、「V作戦」自体が非常に機密性の高いプロジェクトだったこともあり、この艦の開発経緯については不明な点が多い。一説には「SCV-X計画」と呼ばれる宇宙空母の開発プロジェクトから生まれたSCV-27A計画が、「V作戦」発動とともにホワイトベース級強襲揚陸艦として転用されたともいわれている。

ホワイトベース級強襲揚陸艦の最大の特徴は、艦載機（主にMS）射出用のカタパルトデッキを備えている点である。これは一年戦争の時期としては非常に珍しく、公国軍の艦艇にも見られない仕様であった。この機構を備えた格納デッキのブロックが前方に大きく張り出していることから、公国軍では“木馬”のコードネームで呼ばれることとなった。また、大気圏突入・離脱能力を有しており、大気圏内ではミノフスキー・クラフトによって飛行することが可能である。これは、ホワイトベース級強襲揚陸艦を中心とした部隊が1ユニットであらゆる戦況に対応できる“多用途部隊”たり得ることが要求されたためであった。ただし、その特異な艦体構造が多くの武装を装備することに向いていなかったため、戦闘艦としての火力は遠洋艦クラスに留まっている

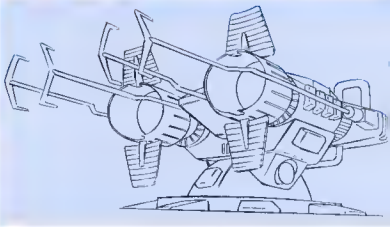
「星一号作戦」では、キシリア・ザビ少将麾下の独立第300戦隊との交戦によって本隊との合流が遅れ、ソーラ・レイ照射後のルザル艦隊に編入されてSフィールドでの作戦行動に参加することとなった。さらに、攻防戦の最中にエンジンブロックを破壊されてア・バオア・クーに擱座、白兵戦を経て要塞陥落の直前に轟沈された。一年戦争における連邦軍の勝利の象徴ともいうべき艦は、最後の戦いでその任務を全うしたのである。

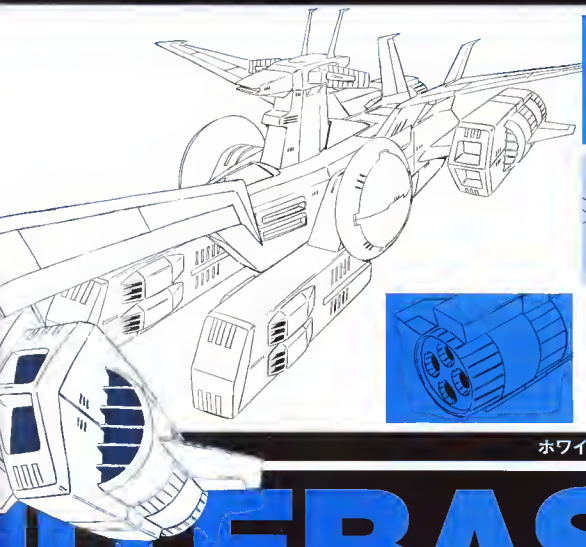


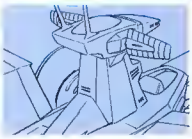




メガ粒子砲



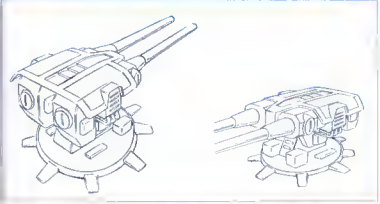


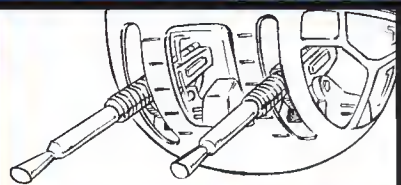


ホワイトベース級強襲揚陸艦

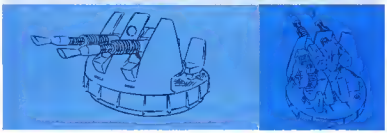
WHITEBASE class

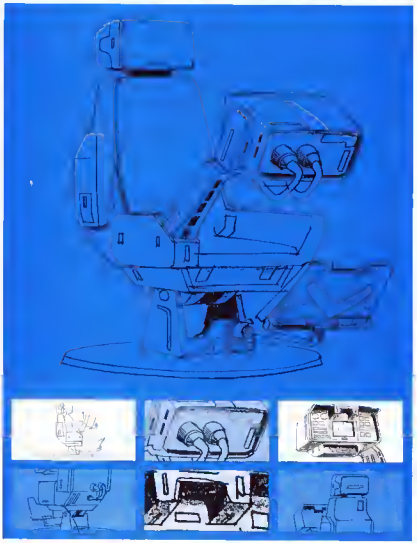
主砲

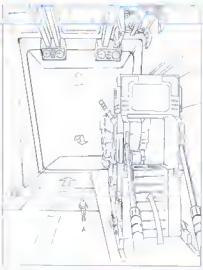


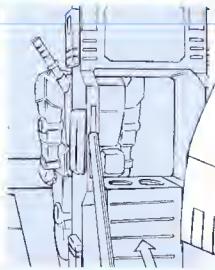


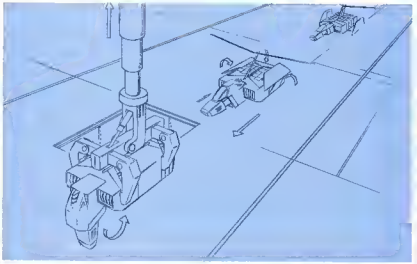
機銃座



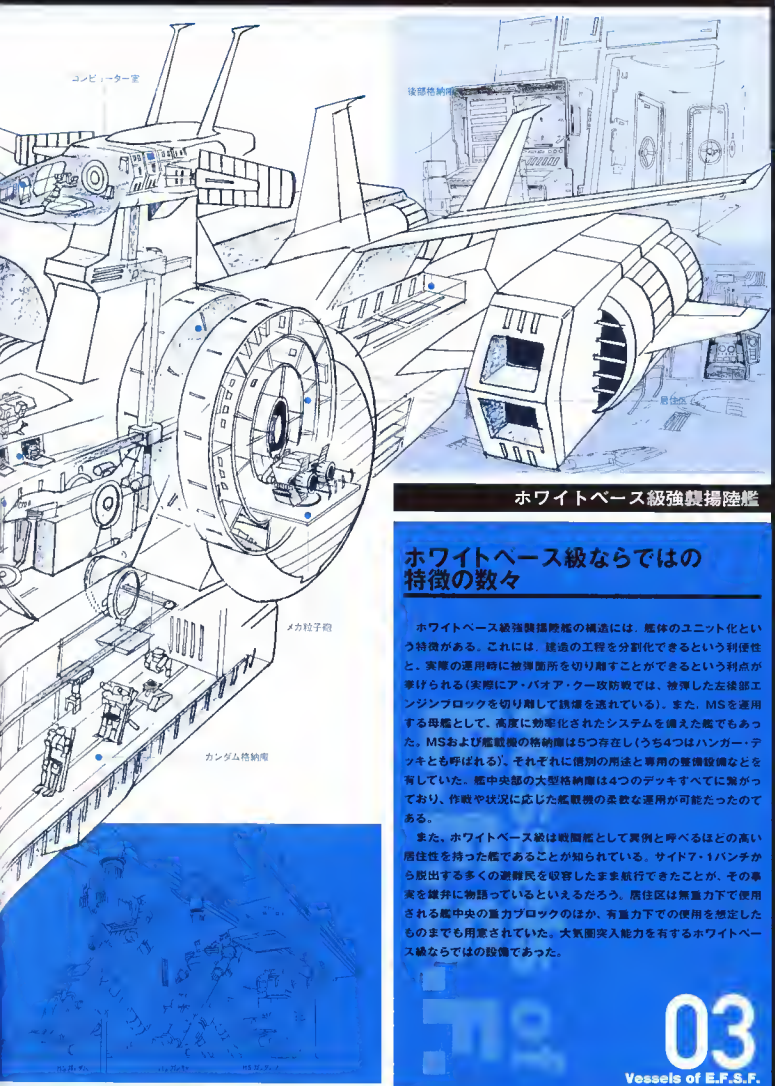








WHITE SEA class



ホワイトベース級強襲揚陸艦

ホワイトベース級ならではの特徴の数々

ホワイトベース級強襲揚陸艦の構造には、艦体のユニット化という特徴がある。これには、建造の工程を分割化できるという利便性と、実際の運用時に被弾箇所を切り離すことができるという利点が挙げられる（実際にア・バオア・クー攻防戦では、被弾した左後部エンジンブロックを切り離して誘爆を逃れている）。また、MSを運用する母艦として、高度に効率化されたシステムを備えた艦でもあった。MSおよび艦載機の格納庫は5つ存在し（うち4つはハンガー・デッキとも呼ばれる）、それぞれに個別の用途と専用の整備設備などを有していた。艦中央部の大型格納庫は4つのデッキすべてに繋がっており、作戦や状況に応じた艦載機の柔軟な運用が可能だったのである。

また、ホワイトベース級は戦闘艦として異例と呼べるほどの高い居住性を持った艦であることが知られている。サイド7・1バンチから脱出する多くの避難民を収容したまま航行できたことが、その事実を雄弁に物語っているといえるだろう。居住区は無重力下で使用される艦中央の重力ブロックのほか、有重力下での使用を想定したものまでも用意されていた。大気圏突入能力を有するホワイトベース級ならではの設備であった。

03
Vessels of E.F.S.F.

特殊部隊ホワイトベース隊について

ホワイトベース隊成立の経緯

ホワイトベース隊（本書では「WB」隊と表記）といえば、一年戦争での活躍から広く知られている部隊である。その要因は、この部隊が一年戦争で多大な戦果を挙げたことだけではなく、その特異な成立の経緯にもあるといえるだろう。

WB」隊が実働部隊として成立したのは、U.C.0079年9月18日のことである（クルーたちが正式な軍属となったのは1月30日）。最終トライアルを終えたRXシリーズを受領するために〈WB〉が寄港したサイド7・1バンチを、公国軍MS部隊が奇襲を仕掛けたことによって予定されていた正規乗務員の大半を失い、〈WB〉は士官候補生や訓練生、民間人によって運用されることになったのである。その状況の中で、〈WB〉隊は連邦軍首脳部が想像し得なかったほどの絶大な戦果を挙げながら、つねに最前線を転戦していくこととなる、素人集団と称しても過言ではなかった〈WB〉隊が終戦まで生き延びていけたのは、なによりも彼ら自身の成長に拠るところ大きい。それこそが、人々が〈WB〉隊の残した数々のエピソードに興味を寄せる原因でもあるといえるだろう。

連邦軍内部における〈WB〉隊の位置付け

前述の通り、当初の予定とは異なる形で運用されていった〈WB〉隊だが、連邦軍首脳部はこれをどのように見ていたのか？〈WB〉隊が担うはずであった「V作戦」のMS運用に関する実戦テストは、公国軍への反攻にとって非常に重要なファクターであった。しかし、当時の連邦軍には失われた人員を補充する余裕がなかったと考えられる。そのため、首脳部は彼らに〈WB〉を任せざるを得なかったと思われている。しかし、地球に降下し公国軍の勢力圏を単独で突破していくにつれ、その見解は徐々に変化していった。レビル将軍をはじめとする一部の将官は〈WB〉隊の乗員たちに"ニュータイプ"の可能性を感じ、引き続き彼らに運用を任せる決定を下す。ただし、そうした将官は首脳部において少数派であった。かくしてジャブローに到着した〈WB〉隊は、ティアンム中将麾下の第2連合艦隊に編入され、第13独立部隊として遊撃任務に就くこととなる。この処置には、後に控えるソロモン攻略戦と星一号作戦の存在を公国軍の目から逸らすための囮という意味合いが強かった。実際、ふたたび宇宙に上がった〈WB〉隊は度々公国軍の攻撃を受けている。そういった点では、連邦軍首脳部の思惑はある程度成功していたと考えるべきであろう。結果として〈WB〉隊はア・バオア・クー攻防戦の最終局面で艦を失い、その役目を終える。その後の乗員たちの処遇は、一年戦争の英雄に対するものとしてはあまりに冷たいものであり、連邦軍首脳部の主流派がいかに〈WB〉隊を邪魔者扱いしていたかの表れといえるだろう。

「星一号作戦」における〈WB〉隊の働き

〈WB〉隊が「星一号作戦」にも参加したことは、前述の通りである。彼らはソロモン攻略後、敵発的に攻撃を仕掛けてくる公国軍部隊を迎撃しつつ、本隊との合流ポイントに向かった。しかし、数々の交戦によって行程に遅れが生じた〈WB〉隊が合流ポイントにたどり着いたのは、公国軍のソーラ・レイが連邦軍主力艦隊を襲った後のことであった。連邦主力艦隊がルザル艦隊として再編される中で〈WB〉隊も同艦隊に編入され、Sフィールドからの進攻に参加する。この戦いの中で〈WB〉のMS部隊、特にRX-78は目ざましい活躍を見せ、ルザル艦隊がア・バオア・クー上陸に成功する大きな一因となった。一方の〈WB〉はア・バオア・クーからの砲撃を左舷エンジンに受け、要塞への着底を余儀なくされる。〈WB〉隊の乗組員たちはそのまま白兵戦へと移行しつつ、退艦準備を進めた。その直後に〈WB〉は爆発、轟沈する。この迅速な脱出劇は〈WB〉隊の乗組員にニュータイプの素養があった証であるという見方が多いが、それよりもアムロ・レイ少尉の傑出したニュータイプ能力に拠る部分が大きいといえるであろう。いずれにせよ、〈WB〉隊は最後の戦場でも大きな戦果を挙げた。つねに激戦の中に身を置いてきた部隊の劇的な終幕であった。

ニュータイプ部隊の真実

一年戦争において〈WB〉隊が絶大な戦果を残した要因として最初に挙げられるのが、彼らが"ニュータイプ部隊"であったという見方である。"ニュータイプ"とは、シオン・ダイクンが提唱した理論である。一般的には「宇宙という新たな生活圏を得ることによって、知覚力・認知力を増大させた人類」と認識されているか、その詳細については現在でも諸説紛紛である　一年戦争という戦時にあっては、ニュータイプは突出した戦闘能力を有した人間と理解されていた　素人の集団でありながら大きな戦果を挙げてきた〈WB〉隊もまた、ニュータイプの集まりであると考えられることもあり、連邦軍首脳部はその風聞を利用して彼らを囮に利用したのである。事実として〈WB〉隊の乗組員たちがニュータイプであったかどうか、それについては真相が明らかになっていない　ただし、RX-78のパイロットであったアムロ・レイについては、戦後ニュータイプと断じられ、連邦軍の監視下に置かれたという情報も存在する　重要なのは〈WB〉隊が"ニュータイプ部隊"であったかどうかということではなく、その評価自体が実質的な効力を有していたことであるだろう

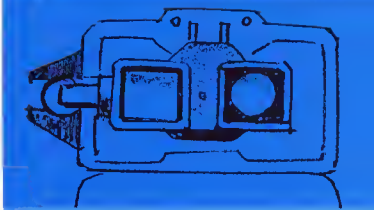
優れた性能を有する RXシリーズのコクピット・モジュール

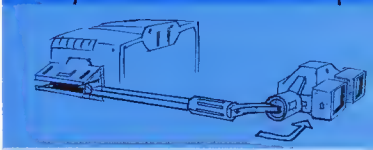
FF-X7"コア・ファイター"は、「RX計画」の元で開発された多目的戦闘機であり、同時にRXシリーズのコクピット・モジュールとして考慮された脱出ポッドである。RXシリーズに搭載された教育型コンピュータの保護とパイロットの生還率向上を目的とした「コア・ブロック・システム」の機能を有しており、同時に戦闘機としても高い汎用性を獲得していた。しかしながら、機体が小型であったために火力が貧弱であり、航続距離や戦闘継続時間にも問題を抱えざるを得なかった。そのため、ブースター兼武装ユニットを装着することで機体の強化を図り、戦闘機としての価値を高めるための開発が進められることとなる。それが"コア・ブースター"と呼ばれるものである。

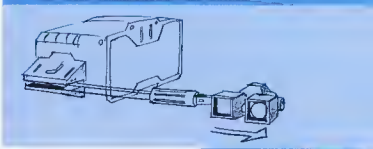
この増加ブースターには大気圏内外での運用を前提とした熱核ハイブリッド・エンジンが採用され、その出力を利用したメガ粒子砲2門や多目的ミサイルベイなどが装備されている。コア・ブースターは一年戦争終戦までに16機が生産され、6機が実戦投入されている。うち2機は(WB)隊に配備され、005、006の機体番号を与えられて運用されることとなった。ア・バオア・クー攻防戦には、セイラ・マス少尉が運用する006のみが参加し(005は先のソロモン攻略戦において撃墜されている)、戦闘中に機界して被害表層に不時着している。

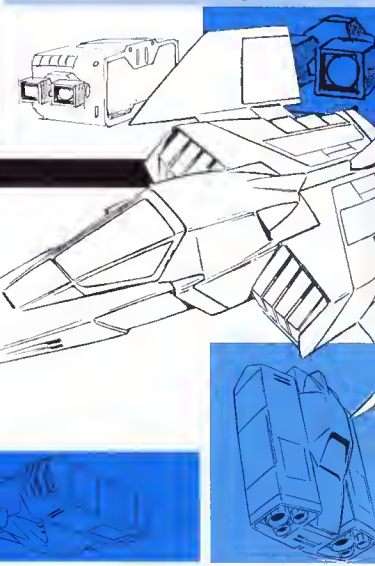
01
Space fighter/etc

照準器









コア・ファイター

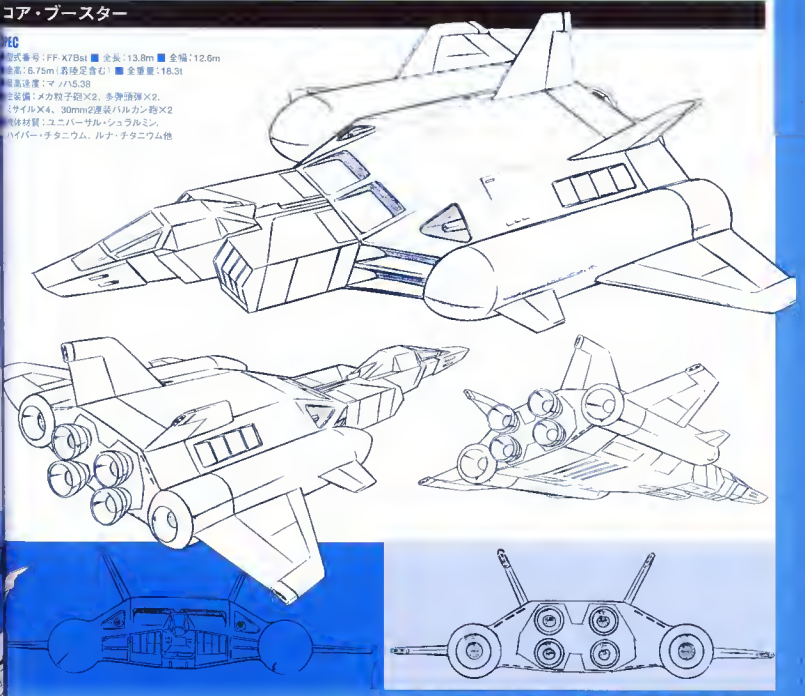
SPEC

- 型式番号：FF-X7
- 全長：8.6m(翼設、全幅：5.8m／全高：3.2m)
- 全重量：8.9t(翼設4.21)
- 大気圏内最高速度：マッハ4.8(翼設3.6)
- 主装備：30mm2連装バルカン砲×2(翼設25mm)、4連装空対空ミサイル・ランチャー×2
- 機体材質：ルナ・チタニウム

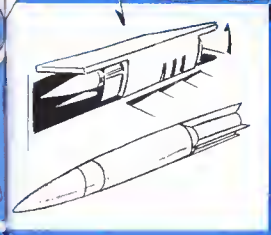
コア・ブースター

SPEC

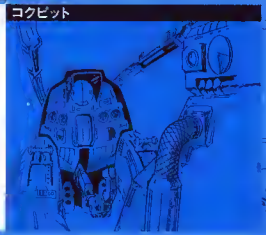
形式番号：FF-X7Bst ■ 全長：13.8m ■ 全幅：12.6m
全高：6.75m（着陸足含む） ■ 全重量：18.3t
最高速度：マハ5.38
武装備：メガ粒子砲×2、多弾頭弾×2、
ミサイル×4、30mm2連装バルカン砲×2
機体材質：ユニバーサル・シュラルミン、
ハイパー・チタニウム、ルナ・チタニウム他

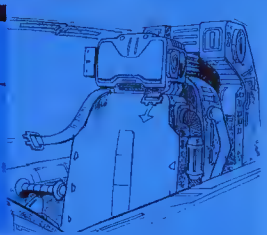


CORE-BOOSTER
CORE-FIGHTER



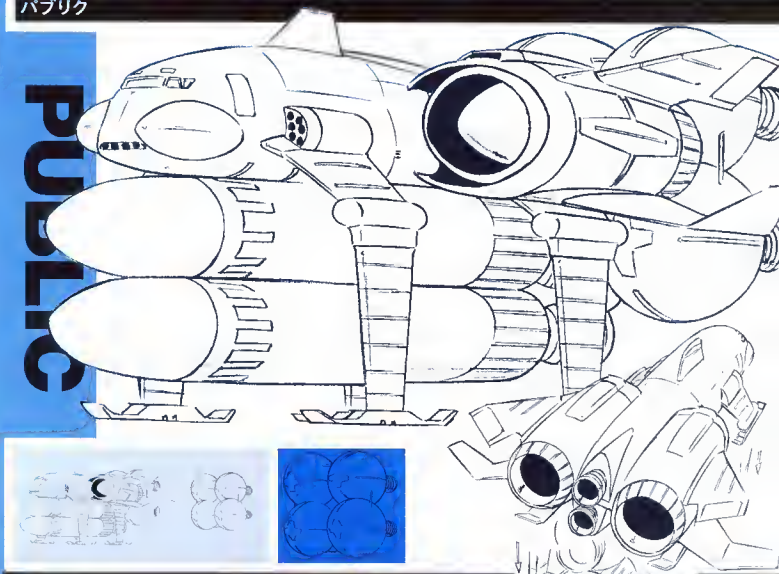
コクピット





パブリク

PUBLIC



02
Space fighter/etc

対要塞戦に活躍した突撃艇

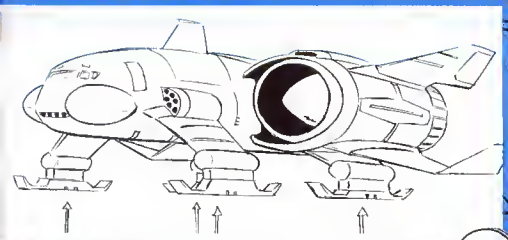
連邦軍が一年戦争において運用した宇宙艇で、「突撃艇」に分類される。機体とほぼ同サイズの大型ミサイルを船殻に2基搭載する構造で、この質量を運搬するに足る推力を得るために、ブースターを装備する仕様となっている。大型ミサイルによる一撃離脱戦法が主な運用法となるが、ミサイル発射後はブースターを切り離し、通常の戦艇艇としても活用することが可能だった。しかしながら、簡定武装が貧弱で火力も低かったため、戦力としてはあまり期待できなかったといわれている。

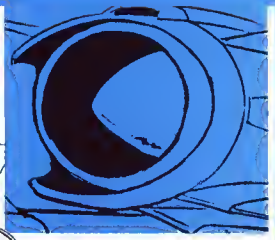
大型ミサイルには核弾頭を用いることも考慮されていたが、南極条約の発効によって核兵器の使用が制限されたため、突撃艇としての役割は薄れていった。そのため、対要塞戦においてビーム撹乱膜を展開するという新たな戦術に活用されることとなる。これは、ビーム拡散用粒子を積載したミサイル(M弾頭とも呼ばれる)によって、当該戦域のビーム兵器を使用不可能にするというものであった。この戦法はソロモン攻略戦で特に効果を発揮したが、ア・バオア・クー攻防戦では公国軍の対応策によって空振りに終わっている。

〈WB〉乗員の命を救った小型艇

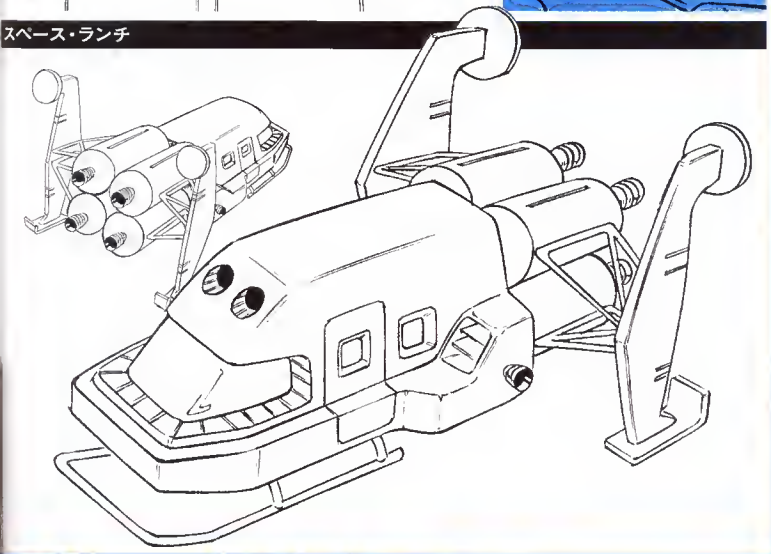
宇宙内火艇、もしくは内火艇とも呼ばれる宇宙用小型艇。宇宙船と基地、あるいは宇宙船同士の間などを、乗員を載せて行き来することを目的としており、運用の利便性を考慮してエア・ロックを装備している。このタイプは、ホワイトベース級強襲揚陸艦に搭載された後期型で、同艦から80年代前半まで使用が確認されている。推進機関を有しており、上記の用途のほかにも緊急時の脱出用として用いられることもあった。しかしながら、船体自体があまりに小型なことから航続距離や推進力は低く、マゼラン級やサラミス級に装備されていた専用の脱出ポッドに比べると生存性は低かったといえる。ア・バオア・クー攻防戦において要塞表面に擱座した〈WB〉では、轟沈前に乗員がこのスペース・ランチを使って脱出に成功している。

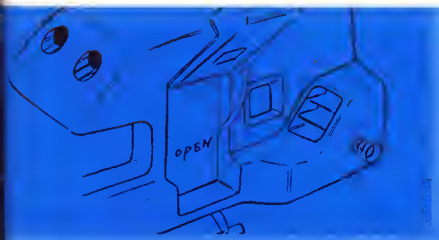
03
Space fighter/etc

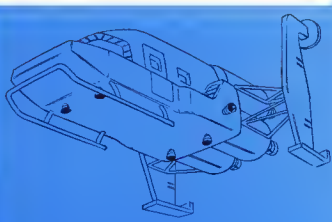




スペース・ランチ







SPACE LAUNCH

地球連邦軍がガンダムに求めたもの

ジオン公国のMSの代表格がザクⅡであるように、地球連邦製MSの代名詞的存在として知られるのがガンダムである。ジムではなく、ガンダムが連邦製MSの象徴となり得たのは、ガンダムがMS全般に与えた影響、そして何よりも、その伝説的活躍によるものが大きいだろう。ガンダムがMS全般に与えた影響とは、MS用ビーム兵器や新マテリアルの確立など純粋な技術面でのものや、「MSの有り様」の方向付けなどで、これは開発当初からガンダムに期待されていたファクターであった。

一年戦争の終結において連邦軍は、ジオン軍の新兵器MSに完膚なきまでに叩きのめされた。MSへの対策に迫られた連邦軍は、単純かつ的確な回答を出す。それはジオンのMSに対抗できるMSを開発することであった。戦車に太刀打ちできる陸戦兵器が戦車であったように、戦闘兵器であるMSに勝てるのは、同じ戦闘兵器のMSなのである。

そして、「V作戦」において数種類のMSが開発されることになるが、その内の2機――RX-75ガンタンクとRX-77ガンキャノン――は大艦巨砲主義の尻尾を引きずった機体であった。MSは巨大人型兵器というカテゴリーに分類されるように、歩兵同様、戦闘距離に合わせて戦闘を行なうための兵器である。ガンタンクやガンキャノンは支援や砲撃には適しているが、MSとの"戦闘"には向かない「MSもどき」に過ぎなかったのだ。この時点での連邦軍は、ミノフスキー粒子の影響下の戦闘＝有視界戦闘がどのようなものか、よく理解していなかったのである。それらの「MSもどき」の後を受けて誕生したのが真の意味でのMS、RX-78ガンダムである。

ガンダムは、MSとの戦闘を強く意識したマシンとして完成しており、ガンキャノン以前の機体に見られたような本体搭載の大型火器による支援兵器としての要素はほとんど外されてしまっていた。まさに、MSを倒すためのMSであったが、連邦軍はガンダムを以ってジオンをねじ伏せようと考えていたわけではない。ガンダムは、生産性を度外視した高性能の万能MSであったため、量産にはまったく向いておらず、ガンダムで「戦争」はできなかったのである。

ガンダムに求められていたのはMSの必要条件の模索であり、量産型MSの雛型となることであった。これは、ガンダムからMSに必要なデータのみ抽出して、量産型MSを作ることを意味していた。単純に言えば、ガンダムの廉価版を作ると言うことである。実際、ジムはガンダムの簡略版的な位置付けの機体として完成することになる。

そして、ガンダムに課せられた量産機の雛型と言う使命は、早々に終わることになる。ガンダムのテストが始まったのがU.C.0078年8月であるが、9月には成り行きで実戦に投入。10月中にはジムの量産が本格化している。この3ヶ月で（ジムの量産の目途が付いた時点で）、テクノロジー面におけるガンダムの役目は終わっていると考えることもできる。実際、サイド7出港以降のホワイト・ベース隊への待遇は、レビル将軍の個人的な配慮はあったものの、冷遇と言って過言ではないもので、連邦軍上層部は比較的早い時期にガンダムに見切りを付けていたと言ってもいいだろう。いかに高性能な試作機であっても、MS単体が戦争の帰趨に影響を与えることなど皆無なのだから、当然の扱いではあったかもしれない。

しかし、軍内のガンダムへの期待は、それまでとは異なる形で現れることになる。それが、本稿冒頭で紹介した「伝説的活躍」に裏付けられたものである。

大戦末期のガンダムは、数々のジオン軍MSや艦艇を撃破した機体、ニュータイプ部隊の中核として認識されるようになっていた。そのためか、ガンダムを擁するホワイト・ベース隊は独立戦隊＝囮部隊として投入され、数々の難題を排除することになる（囮部隊とされたのは、単なる厄介者という側面もあったが）。

ジャブロー戦後、囮役を終えて宇宙に上がったガンダムは、キャメル・パトロール艦隊やコンスコン艦隊と言った大部隊を壊滅させた他、ニュータイプ専用機を含む数々のMSやモビルアーマーを撃墜。ソロモン攻略戦やア・バオア・クー戦でも、遊撃機的な戦いで多くの敵機を狩り去った。一年戦争におけるガンダム（アムロ・レイ少尉の2号機）の総撃墜数は100以上に登ると考えられている。

これらの戦果はパイロットの能力による所が大きかったが、軍内部ではハードウェアであるガンダムが注目されることとなり（パイロットのアムロ・レイ少尉は、"ニュータイプ"能力を危険視され、軍の監視下に置かれたが）、以後もガンダムの名を冠した数々のスーパーMSが生み出されていく下地となった。特定兵器の名称が、後継の兵器に受け継がれることはあるが、ガンダムの場合、以後80年以上もガンダムの名を持つMSが誕生し続けることになり、これは「ガンダムに対する神聖視」

Mobile Suit column 02

RX-78 GUNDAM

モビルスーツコラム　RX-78　ガンダム

とも言える評価が存在していた設定となっている。

この『ガンダムに対する神聖視』は、一般にガンダム信仰と呼ばれ、軍人やMS関係者のみならず、一部は一般の市民たちにも広まっていく。また、連邦軍上層部でのガンダム信仰は、MSに万能性を求める"MS万能説"とも言う[illegible]変化したとも言われ、一年戦争[illegible]後の連邦軍が通常型モビルアーマーの開発に不熱心だったのは、ガンダム信仰・MS万能説による所が大きいとする説もあるほどである。

量産機の母体としてのガンダムと、超兵器としてのガンダム——。一年戦争以後登場したガンダム・タイプのMSは、後者の色合いを強くしていく。だが、それらの新ガンダムで培われた技術は量産機にフィードバックされてもおり、一年戦争でRX-78ガンダムが背負うことになったふたつの要素は、時代によってバランスを変えながらも受け継がれていくことになるのだった。

RX-78　ガンダム
（ビームライフル装備、ビームサーベル、ガンダムシールド付属）

特別な存在
"白い奴"と呼ばれたMS

ガンダムというMSは特別な存在だったのだろうか？

MSという新兵器の登場により劣勢に立たされた連邦軍が全精力を注いで開発を押し進めた「対MS戦用MS」、それがガンダムなのである。一年戦争下の膠着状態にロールアウトしながらも、その後開発されたMSを凌駕する高性能ぶりを見せ続けた。

特に、アムロ・レイ少尉（当時）の乗機として知られるガンダム2号機は、ジオン兵にとって「白い奴」としてあまりに有名。戦場での認知度は格好の標的の裏返しでもあるにもかかわらず、この白いMSは最終決戦ア・バオア・クーまで最前線で戦い、生き残ってきたのである。

戦後もガンダムの銘を継ぐMSが数多く開発されているが、RX-78と同様の白を基調としたトリコロールカラーのものが多いのは偶然ではない。やはり一年戦争を知っている者にとって、ガンダムというMSは特別な存在だったと考えざるを得ない。

Figure "RX-78 GUNDAM" Manual
付属フィギュア解説　RX-78　ガンダム

真打登場!
細かい作り込みに注目

今回のフィギュアは真打、ガンダムの登場である。

ユニット化されたシルエットに整合性を伝えるパネルラインを細かなモールドで表現、両肩のマーキングもワンポイントとして効いているかと思う。股と足首のそれぞれにボールジョイントを採用し、全身12箇所可動の大胆なポージングを可能としている。武装はビームライフルの他にビームサーベルを選択できる。その際、バックパックからビームサーベルの柄を取り外せるようになっている点にも注目してほしい。また、顔の作り込みも要チェックだ。1/220スケールとは思えない造形と塗り分けを、ぜひ、あなた自身の目で確認して頂きたい。

前号のザク同様にジオラマベースに透明支柱を使用して浮遊させることができる。ジオラマベース同士も接続可能なので複数揃えるのも楽しいだろう。

今後のコレクションも含め全シリーズを集めると、あの「ラストシューティング」が再現可能なので乞うご期待!

●フィギュア・ベース写真は試作品を使用している場合がございます。仕様は製品向上の為、変更になることがございます。あらかじめご了承ください。

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポートvol.2 地球連邦軍兵器編

CONTENTS

ア・バオア・クーを制した地球連邦軍兵器 2

地球連邦軍モビルスーツ解説 4

地球連邦軍モビルスーツ用語解説 10

地球連邦軍兵器概要 12

地球連邦軍モビルスーツ概要 14

ア・バオア・クーにおけるモビルスーツ運用 16

地球連邦軍モビルスーツ用兵装 18

地球連邦軍戦艦解説 24

特殊部隊ホワイトベース隊について 32

戦闘機、戦闘艇、その他 34

モビルスーツコラム RX-78 ガンダム 38

付属フィギュア解説 40

次号予告 43

2004年1月25日発行 トイブックコレクションシリーズ ガンダムオペレーション ア・バオア・クーvol.0002

価格 1200円(本体1143円) 発行人 小松崎孝一 編集人 猪保雄次 企画・編集 株式会社セイカ トイブック事業部

発行・発売 株式会社セイカ 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-8 栄泉岩本町ビル 電話 03-5820-3745(編集)

トイブックホームページアドレス http://www.toybook.jp 印刷所 図書印刷株式会社

トイ 製作管理 内山博之 ブック 執筆 坂口逸仁、杉山和紫 エディトリアルデザイン 有限会社ロケットパンチ MSイラスト 中村浩一

アドバイザー 岡崎昭行 撮影 スタジオアール、中村浩 撮影協力 月刊ホビージャパン パッケージデザイン 神田英智子(ブレインナビ)

編集協力 杉原克由、大矢直人(ブレインナビ) 監術:株式会社サンライズ

●本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部、あるいは全部について株式会社セイカトイブック事業部の承諾を無しに、いかなる方法によっても無断で複写、複製することは禁じられています。●乱丁本、落丁本、増刷時における欠品及び破損は、小社品質管理室(03-5820-3743)までお送りください。送料弊社負担にてお取替えいたします。©創通エージェンシー・サンライズ

ISBN 4-902399-01-6 Printed in Japan. Made in China

NEXT ISSUE 次号予告

Vol.0003

GUNDAM OPERATION
A・BAOA・QU

TOY

コレクションフィギュア3
RX-77　ガンキャノン
ビームライフル装備、
平手パーツ、
コアファイター付属
専用ジオラマベース

BOOK
ア・バオア・クー レポートvol.0003　ジオン公国軍兵器編
ジオン公国軍モビルスーツ・戦艦解説、ア・バオア・クーにおけるモビルスーツ運用、etc

2004年2月25日発売予定

GUNDAM
OPERATION

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0002

地球連邦軍兵器編